
闇と笑顔と紅いリボン ~ a dark and doable dream ~

RAMREAR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇と笑顔と紅いリボン a dark and doable
dream

【Nコード】

N2081Q

【作者名】

RAMREAR

【あらすじ】

ある春の日の出来事だった。一人の青年が、夕日を背に山道を駆け上がっていた。すでに習慣となっている思案に耽るために、青年は山間の公園へと足を動かしていた。夕暮れに染まる街並みを横目に、彼はもうなんども問いかけた質問を自分自身に問うた。

今のままで良いのか。

何度考えても答えはない。

もはや、それは見つけ出すことが出来ないものなのかもしれない。

ない、と諦めかけていた。

彼女に、出会うまでは。

y
m
e
e
t
s
w
o
m
a
n
i
n
t
h
e
d
a
r
k
{

}
b
o

注意

- - - - -

この小説は、

『上海アリス幻楽団』様

製作の弾幕系STG

『東方project』

の二次創作小説です。

原作との設定の相違、オリジナルキャラクターの登場、二次設定、

作者の個人的な見解。

以上のものが含まれています。

原作のイメージを著しく損なう可能性がありますので。

そのようなものが受け容れられない方は、閲覧をご遠慮ください。

また、この小説には、一部、残酷な表現、非常識な言動、などが含まれています。

これらもご承知の上でご閲覧ください。

- - - - -

ある星の輝く夜だった。桜色に色づく山の中腹辺りに作られた公園の一角。乗ると付け根から折れてしまうのではないかと思うほどに錆びたブランコの隣、チカチカと心許ない電灯に照らされた所々朽ちた木製のベンチに、青年は腰掛けていた。

何をするわけでもなくただ座って、眼下に広がる自分の住む町を見下ろす。お世辞にも綺麗とは言えない夜景。広い闇の広がる平野に、民家の明かりがポツポツと灯っているだけの物淋しい風景。地平線では、夜空の闇と地上の闇が交わっている。

「はあ…変わらないな。ここも、俺も」

ベンチに座り、誰もいない公園の虚空に溜め息を漏らした青年、『神代 零』（こうじろ れい）はこの景色が大好きだった。

零には、親が居なかった。いや、正確に言えば、零は自分の親を知らなかった。

物心着いた時には、町の小さな保育施設で赤の他人と付き合いながら生きてきた。拾われたのは十八年前のこの季節。時間は夜。場所、ちょうど今彼が腰掛けているベンチの上だったらしい。

別段、彼がその事を負い目に感じているわけでも無いし、彼が自分の産みの親を憎んでいるわけでもない。寧ろ彼にとって自身の生い立ちは一つの信念となつて彼の精神を支えるものとなっていた。

もし、自分がその日、この場所で拾われなかったとしたら、自分

はどうなっていたのだろうか。

誰にも気付かれずに餓死？

野犬や野鳥の餌？

少なくとも、寿命より遥かに短い一生の終わりを迎えていただろうことは容易に想像できる。

実際、彼が拾われたのは奇跡と言っても良いだろう。

この公園は、普段誰も寄り付かない程に寂れている。一応、一昔前は地元でも数少ない桜の見れる場所、ということで人が見物しに来ることもあっただろうが、今では街道沿いにも堤防にも桜はあり、わざわざ山の中腹にある公園に見物しに来ると思えない。

そう、彼は救われたのだ。

一人ではどうしようもない、深く、重い闇の中から。

まるで、夜空に輝く星の様に、広く闇に包まれる平野にポツポツと灯る民家の光の様に。

どんな闇の中にも、必ず光はあるのだ。闇を隅々まで照らす事は出来なくても、その中で輝く灯りにはなれる。

誰かの光になろう。

せめて、足元位は照らすことの出来る灯りに。

それが、闇から救われた零の信念であり、願いであり、目標であった。

これまでの人生、零は自分の信念に従って色々な事をしてきた。

といつても、普通の人間である彼にそんな大それた事が出来るわけもない。出来ることといえば、身近な人の手伝いや、ちよつとした人助け。子供心に憧れた英雄ヒーローのように、悪を打ち倒し、善を守るなんて事はできやしない。

誰かの光になる。あまりにも曖昧すぎるその言葉。困っている人を助けることが、本当にその人にとって、零自身にとって、暗闇を照らす光になることなのだろうか。

頭の中に浮かぶのは、闇の中に燦然と輝く一つの光。曖昧なのに、はつきりとその明るさを顕示する光。

零は、もう何度も思い浮かべては沈めてきた想像を消し去るかのように頭を左右に振った。その動作が、自分の迷いを認めているかのように滑稽だった。

やめよう。良いじゃないか今のままでも。いつか見つかる。自分だけの答えが。

そう心に言い聞かせて、零は眼下の景色をもう一度見下ろした。

「そろそろ帰ろう。誰が待っているわけでもないけど」

自嘲気味に言葉を漏らした零は、ベンチに置いていた携帯電話を着ていたパーカーの右ポケットに無造作につっこむと、ベンチから腰を上げた。古びたベンチの間接部分から、ギィと軋む音が聞こえる。何度も聞いた音だが、年々軋みは大きくなっている。もうこのベンチも寿命なのかもしれない。

年老いたベンチを労るように、零はベンチの背もたれを軽く撫でた。

気が済んだのか、零が公園の出口へ向かおうと踵を返したとき、山の開けた方から、すこし生暖かく強い一陣の風が公園に吹いた。

「おっ、と。…春一番かな？」

ちよつと体制を崩しかけるほどの風。ブランコはギィギィと音を立てながらその身体を振り子のように揺らし、滑り台は小刻みに振動していた。

ふわつと舞い上がった早咲きの桜の花びらが、電灯の明かりに照らされて宙を舞い、先ほどまで零が腰掛けていたベンチや地面、公園の至る所に舞い落ち始めた。

幻想的な風景、というには些か美しさが足りないが、零が足を止めるには十分すぎるほど優美な光景だった。舞い落ちる桜色の花弁が、過ぎ去った冬を忍ぶ別れの雪の様に見えた。

しかし、その風景も長くは続かず、数十秒ほどでそこはいつも通りの寂れた公園だった。あとに残ったのは、未だに揺れの収まらないブランコの軋む音と、身体に張り付くような生暖かい残り風だけ。目を奪われていた零も、現実に取り戻されてしまっていた。

ちよつと名残惜しい気持ちを抑えて、何の気なしに腕時計を覗くと、すでに日付が変わっていた。

「やばっ！もうこんな時間か！明日も学校だからな…、帰るか」

すこし急ぎ足で公園を後にする青年。そのポケットの外側に出ていたストラップから、小さな袋のようなものがこぼれ落ちた。

青年が去って数十秒後、公園は沈黙に包まれていた。しかし、どこか違和感のある雰囲気。

チカチカと光る電灯の作り出す陰には、地面に平行に延びる人影があった。

ゆらゆらと揺れるその影は、地面に落ちていた小袋を拾い上げると、小さく笑みをこぼし、音もなく闇に消えていった。

その姿を見届けていたかのように、点滅を繰り返していた電灯がフツとその力をなくし、公園は完全に闇に包まれた。

次の日、零はいつも通りに学校に行き、いつも通りに授業を受け、放課後になった。

高校生活もあと数日で終わりを告げるこの時期、同級生たちは、高校最後の思い出を作るためにはしゃぎ回っている。

零にも誘いの声が掛かるが、零はそれをやんわりと断ると、校門をくぐって足を外へ向けて動かした。

級友と遊びに出掛けるのは吝かではなかったが、生憎彼は探し物の最中であつた。

探しているのは、彼がいつも肌身離さず持っている小さな手作りの御守り。無くさないように根付けを付けて、携帯電話のストラップにしていたのだが、根付けだけを残して、御守りがなくなっていたのだ。

気づいたのは今朝、遅刻ギリギリの時間帯に起きてしまった自分を叱咤しながら、携帯電話を取り出した時であった。

「昨夜まではちゃんと付いてたんだけどなあ……」

そう、昨夜公園に着き、携帯電話をベンチに置いた時までは確かに付いていた。ということは、あの公園、もしくは公園からの帰り道で外れてしまった可能性が高かった。

零は、どうしてもその御守りを諦める気にはなれなかった。というのも、それは自身の産みの親に繋がるたった一つの大切な物だったからである。

彼らがどんな気持ちで今から捨てる我が子にあの小さな手製の御守りを持たせたのかは分からないが、零には自分を按じてくれたものであると思えて仕方なかった。

学校が終わり、時刻は夕方6時を回っていた。直に日が暮れて小さな御守りなど探すことが出来なくなるだろう。

急がなくては、と零は足に力を込めて、山道への道を駆けていった。

結果から言えば、御守りは見つからなかった。

公園に至る山道で探すことの出来る所は全て調べてみたが、ここにもない。やはり、3センチほどの小さなものなど、どこかに飛ばされてしまったか、野良犬が啗えて持っていてしまったのかもしれない。

最後に残った場所は、昨日の公園。確率から言えばこの場所に落とした可能性が一番高いのだが、何故か分からないが、ここに御守りはない。と心が告げていた。

「といつても、探してないのはここだけなんだよなあ……」

道中に時間を費やした結果、もう辺りは殆ど暗闇に包まれてしまっていた。西の地平線に沈んでいく夕日が橙から藍色、紫と見事なグラデーションを見せている。もう数分すれば、またこの平野に宵闇がやってくるのだろう。

零は、諦め半分といった表情で、公園の入り口に立った。

いつも通りに寂れきった公園。ぽつんと立った電灯はちょうど暗さを感じたのか、零が公園に入ったと同時に点滅を始めた。

桜の花びらが散りばめられた地面を踏みしめて、電灯の下へと足を進める。あまり大きくはない早咲きの桜、錆びたブランコと滑るものの居ない滑り台、そして朽ち始めている木製のベンチ。

何も変わらない、いつも通り。…の筈だった。しかし、今日はどこかが違う。

空気が違う、とでも言うのだろうか。背筋に冷たいものが走り、身体が小刻みに震える。生暖かい気温が、今では凍えるほどの冷気のように震えを助長する。

人間は想像する生き物である。何かが起きるのではないだろうか。誰かが居るのではないだろうか。現実ではありえないモノがそこに存在することを想像し恐怖する。そしてそれは…本当に創造されて

しまう。

ありえない光景だった。先ほどまではそこにはなかったモノが、そこに突如として存在していたのだから。

「こんばんは。良い夜ね」

零はとつさに足を半歩下げていた。決して意識してとった行動ではなく、ただ身体が反応した。条件反射とでも言うのだろうか、足を下げずにはいらなかった。

「あら？…安心して？なにも取って食おうとしている訳じゃないんだから」

それに不服そうに人影が言葉を発しながら歩を進めてきた。電灯が地を照らしている範囲に入ると、その全貌が明らかになった。

金髪の女性。黒のスカートに、白いYシャツの上に黒いベスト、赤いネクタイリボン。身長はだいたい160センチ前後だろうか。肩口まである金の髪が、電灯の淡い灯りに照らされて、その神々しいまでの色を輝かせる。

一瞬、零は時間が止まった気がした。否、実際に目を奪われて硬直せざるを得なかった。

美しい、と感じた。この状況で感じるものではないと頭では理解出来ていたが、心が思考を妨げていた。闇から現れた彼女は、輝かしいほどに美しい。しかし、彼女が纏う雰囲気は、“闇”そのものだった。全てを包む闇。どんな色も無と化す闇。あまりに純粹で、引き込まれてしまいそうな闇。

「あつ…貴女は…？」

なんとか紡ぎ出した言葉は、何とも情けない言葉だった。それも仕方がないだろう。それほど彼女の存在は、異常だったのだから。

「ああ、やっと言葉を発してくれた。ずっと固まったままだったから、気でも失ったのかと思ってたわ」

心から安堵したかのように零に微笑みかけた女性は、未だ硬直したように身じろぎもしない彼に手招きしながら声を掛けた。

「こつちに来たらどう？ずっと立って話を聞くのも面倒でしょう？貴方が木偶ならそんなこともないんでしょうけど」

その言葉に、零の身体は自然と動いた。先ほどまで感じていた悪寒や雰囲気が消え去り、心なしか、この場の空気がやわらかくなったのを感じたからだろうか。または、彼女の纏う雰囲気に、“闇”に魅せられたのかもしれないかった。

ベンチに腰掛けた女性の下へたどり着くまでの数秒間、零は現在の状況を理解しようと、思考力を最大限まで使用していた。

まず、彼女の異常性。確かにあの場に彼女の存在はなかった。だというのに、彼女は現れた。まるで沸いて出たかのような現れ方。そして、彼女の雰囲気。普通の人間が持ち得ない美しさ。まるで、世界最高の芸術品を目の当たりにしたかのような視認性。そして、稀代の名刀を彷彿させる魅力。どれもが異常だった。

まずありえない。彼女は、ヒトではない。

そこまで理解できたときには、彼の身体はベンチの前に着いていた。目線を横に向けると、女性が微笑みをたたえて零が座るのを待っている。零は、少し躊躇しながら女性の隣に腰掛けた。いつも通り、ベンチの軋む音が公園に響いた。

女性は何も話さなかった。ただ、零の隣に座り、眼下の街並みをやさしそうな瞳で見つめるだけ。すぐに話を振ってくるだろうと身構えていた零にとっては少々拍子抜けであったが、これは良い機会かもしれない。そう思えば、聞くべき事はいくらかでも出てきた。

「俺の名前は、神代零、貴方の名前は？」

そう零が話しかけると、彼女は目線を彼の方に向けて、微笑みながら答えた。

「私は、ミルアよ。宜しくね、レイ君」

ミルアと名乗った彼女は、また質問を待っているかのように何も話さずに零の瞳を見つめていた。どうやら、零の質問に答えてから、本題に入るのだらう。あるいは、そちらの方が都合が良かったのかもしれない。

「それで、ミルアさんは何でこんな所に？言っちゃあなんですが、ここは地元の人も滅多に来ない場所ですよ？」

「ふふっ…それは貴方も同じでしょう？でも…そうね、言うなれば、この景色が綺麗そうだったから、かしら」

そういつて、彼女は目を正面に向けて、物憂げな表情で語り出し

た。

「綺麗よね。宵闇に包まれる街並み。昼間の喧噪が嘘だったかのよう
に静まりかえる自然。微かな灯りが闇を更に際立たせる。今から
数時間は、優しく孤独な闇の世界。そう、私だけの闇」

彼女の言っていることが、零には理解できなかった。なぜなら、
闇に輝く微かな灯りが闇を際立たせるのではなく、広大な闇が、小
さな光を際立たせるものだと思っ
て
いるからである。しかし、
彼女の表情に零は反論することが出来なかった。その横顔は、あま
りにも繊細で、今にも壊れそう
なほど儚いものであったから。

暫し、場に沈黙が訪れた。聞こえるのは、虫の鳴き声とそよ風に
身を揺らす木々の音。気づけば、太陽は沈みきっており、月が代わ
って野を照らしていた。

不思議と、零には彼女と過ごす時間が苦ではなかった。彼女はヒ
トではないだろうと確信していても、彼女が自分に害を為す存在で
はないと直感で感じたからだろうか。

「ごめんなさい。ちょっと自分の世界に入ってしまったみたい。
…それで、他に質問は？」

ふと、彼女が零に話しかけ、彼に質問を促した。真っ直ぐに見つ
めてくる彼女の瞳に、零は視線を合わせて、一番聞くべきで、聞く
べきでない質問を口にした。

「それじゃあ…、…貴方は、いつたい、“何”ですか？」

「ふふっ…分かってるくせに。そう、私は、ヒトではないわ」

そこで一旦、彼女は言葉を切った。まるで、猶予を与えるかのように。ヒトではない。ならば“何”だというのか。

零は、自分でも意外だと言えるほどに冷静だった。人外の者が目の前にいるというのに、恐れを感じない。思考が麻痺しているのかもしれない。本当は、今すぐにここを立ち去り、この記憶を全て忘れて普段の生活に戻るべきなのかもしれない。これ以上聞けば、なにか得体の知れないモノに巻き込まれてしまう様な予感もしていた。

それでも、彼は、真実を知る方を選んだ。

「貴方は…」

「“妖怪”といえば、分かるかしら？」

彼女が明かした正体、それは、彼を巻き込む大きな流れの始まりであり、彼が幻想の世界を知り、たどり着くための小さな鍵だった。

「そう…ですか。分かりました」

「あら？驚かないのね」

零の返答につまらなそうに首を傾げるミルア。確かに、普通ならばもっと驚いても良いはずだ、むしろ未知の恐怖に苛まれて、逃げてしまいたい衝動に駆られるのが当たり前なのだろう。しかし、零は彼女の正体を知って驚くと同時に、どこか納得してしまっていた。

「いや、何となくそんな気がしてましたから」

人外の存在、妖精、神、霊、そして妖怪。彼女が纏う雰囲気は、妖精の範疇に収まるものではないと何故か理解できたし、神というには、あまりに純粹なる闇。姿が見え、実態がある彼女は霊でもない。となれば、後は妖怪であると納得するしかない。それがどんな化け物であろうとも。

「へえ…そーなのかー。驚いたわ、私を見て正体が分かれば怯えてくれるものだと思ってたのに」

「怯えるも何も、理解がまだ追いついてないんですよ。もう数秒したら分かりませんけど」

「ふふっ…貴方って、面白い人間ね」

そう言って、無邪気に笑う彼女。実際に感覚が麻痺しているのは零も感じていた。異質な状況も、今では普通のものとなっている。むしろ、この空間が居心地の良いものの様にすら感じてしまっている。言い表せない心地よさに、零が頬をゆるませていると、ミルアがベンチから腰をあげ、零の目の前に立って口を開いた。

「貴方なら、たぶんあの子を救える。いいえ、確実に」

「…？　いつたい何の話…」

「ねえ。運命って信じる？」

零の疑問を遮って彼女から発せられる疑問。彼女は両腕を真横に広げて、星空を見上げ、くるとダンスを踊るようにその場をゆつくりと回りながら零に問いかけた。

運命、定まった道筋、普遍の流れ。生きとし生けるものは全てが元々定まった流れに沿って生きているという、絶対不可避な真実。その通りならば、この日、この場所で彼が彼女と出会い、話をするのも、最初から決まっていた事になる。

昔、誰かが言っていた。『度重なる偶然は、原初たる運命に等しい』

たった一秒で変わる未来がある。小さな小石が投げられただけで変わる流れがある。無限ともとれる可能性の糸の中の、たった一本を生きる人生。ならば、その選択は初めから決まっていたのではな
いか。零がこの場所に捨てられたのも、拾われたのも、そして、この場所で彼女に会うのも。

「いや、俺は信じてない」

「あら？どうして？」

「だって、選択してきたのは俺だから。こうやって生きてきたのも、今この場所にいるのも、全部。そう思わなきゃ、今までの悩みや苦し
しみも全部、他人のものになってしまふ。俺は、俺だから、自分の生き方を悔やみたい、誇りたい、そして悩んでいたい」

くるくるとステップを踏む彼女に、零はきつぱりと運命を否定した。彼の考えは、酷く利己的で、自己中心的で、前向きだった。だからこそ、彼には進む権利が与えられる。今を生きていられる。それが、ミルアには光り輝く満ちた月光に見えた。

「アハハハ！！貴方って、本当に面白い！まるで、月みたい！」

「それは、褒められてるのかな？」

「そうね。貴方がそう思うなら、そうなのでしょう」

自然と二人の間に笑みがこぼれた。優しい空間。月の下。当初の目的など忘れてしまったかのように、二人で彼らは笑いあった。

ひとしきり笑いあった後、ミルアがもういちど両手を広げて、零に向き直って言う。

「ねえ、貴方がここに来たのは何で？」

その言葉に、零の頭は一瞬混乱するが、すぐに答えを導き出した。

「あつ、そうだ！御守りを探していたんだつた！見てませんか？このくらいの小さな御守りなんですけど」

そう、彼は御守りを探しにここまでやってきたのだ。彼女との邂逅で今まで忘れ去っていたが、あの御守りは彼にとって重要なものだ。そう簡単に諦めて良いものではない。

零は、身振り手振りで御守りの在処をミルアに尋ねるが、彼女は不敵に笑い、零を見つめるだけだった。

「やっぱり知りませんよね…。すいません、ちょっと探してみても良いですか？あるとは思えないけど」

そう言って、零が腰を上げようとしたとき、正面に立っていたミルアが零に顔を近づけてきた。腰を折り、礼をして、彼の顔をのぞき込むように視線を合わせる。

「…？ミルアさん？」

「捜し物は、本当にその御守りだけ？」

「えっ？」

「救うべき弱者？悩み多き愚者？それとも…探すべき自分の信念…かしら？」

頭が真っ白になった。突然、彼女の態度が変わったからではない。自分の心の奥底まで見据えられているかのような彼女の発言に対してだ。

隠していたわけではない。ただ、自分でも納得がいかなかったただけだ。どうして、自分の信念に従うたびに、この身体が少しずつ動かなくなっていくのか。助けた人の感謝を聞くたびに、心が空虚になっっていくのか。

「いったい…何を言ってるんですか。もしかして、貴女は読心術でも使えるとか？」

「そうね。貴方の心が見える訳ではないけど、同じ事かもね。…捜し物が欲しいなら、この手をとって？救いたいものがあるなら、立ち上がったって？幻想が、夢が、果てしなき闇が、貴方を待っている」

零の前に差し出された手、白く、細く、見るからにやわらかそうなその手は、あまりにも魅力的で、魅力的で、気づけば、零はその手を握ろうとしていた。しかし、零の手は寸前の所でピタリと動きを止めた。

たぶん、この手をとってしまえば、自分はもう平穩には帰って来られないだろう。いや、もうすでに巻き込まれてしまっているのかもしれない。ならば、行こう。どんな結末が待っているだろうと。答えが見つかるのならば。

空中を彷徨った零の手は、次の瞬間にはしっかりと彼女の手を握りしめていた。

「…ありがとう。絶対に投げ出さないで、裏切らないで、あの子を…救ってあげてね？」

握りあった手を引かれ、零はミルアの腕の中に引き込まれるように収まり、抱きしめられた。冷たく、暖かい抱擁。突然の事に頭が働かない。

「みつミルアさん？」

「貴方が、闇を照らす一条の光であらんことを願って…。さようなら、きつと、また会えるわ」

混乱する零を余所目に、ミルアから混沌とした闇の霧が発せられる。宵闇にあつてなお暗さの分かる暗黒。それは、零を含め、ベンチ、滑り台、ブランコ、最後には公園をスッポリと覆う闇の球体へと広がった。

それは渦巻きながら収縮していき、さながらブラックホールのように次元を歪ませながら、圧縮され、やがて、消えた。

あとには、公園だった更地と不安定な点滅を繰り返す電灯、花の

落ちた桜、そして、金髪の少女。

「また、会えるよ……？レイ……」

憂いを帯びた表情で微笑みながら真上にある月を眺める小さな影。

やがて、冷たく、強い一陣の風が公園に吹き込むと、その姿は、もうどこにもなかった。

取り残された電灯がその活動を止め、辺りに静寂と寂寥の闇が訪れた。

月下の邂逅 the first encounter with a d a r

ここまでご覧いただきありがとうございます。

この小説は、不定期更新となっています。

読者の方々には申し訳ありませんが、次回の更新まで気長にお待ちください。

それでは、また次回。

招かれた森の中で

新月、それは月のない夜。夜空を飾る大きな光が無くなる時、それは、闇が一番濃くなる日。

月は魔力を持つと言う。その光は魔性の者達に力を与え、更に光を増していく。太陽が王ならば、月は女王。古来より、月はその美しさを謳われる一方、魔の象徴としても扱われてきた。それは、陰と陽、光と闇の、純粹なる対比から来たのだろうか。

一月で回る、月の円舞曲。長いようで短いダンスの始まり。

今日は、新月であつた。

とある世界、月のない夜、人気のない森の中、広場のように木々が周りを覆う拓けた場所があつた。何もない、草も、小石も、何もかもがそこだけ吹き飛ばされてしまったかのように、更地が広がっていた。

異様な雰囲気包まれるこの場所に、突然どこからともなく強い風が吹き込んだ。周りの木々が風の勢いに押されて、その身体を震わせる。木々が広場の外側に押しやられるように靡いていることから、発生源は広場の中心であるようだ。

少しずつ風はその勢いを増し、果てには渦を巻き始めた。森のざわめきが呻きに変わり、周りの木々から葉がもぎ取られ、竜巻と化した豪風に巻き込まれていく。

やがて、空間がねじ曲げられるかのように、その場の次元が揺らぎだした。更に風は強く強く逆巻き、まるで周りの闇をかき集めるかのように中心に黒点を形成していく。

闇は深さを増し、だんだんと大きくなり、ついには広場をスッポリと覆い隠してしまった。無限に続くかと思われた膨張。しかし、その黒い球体は、広場の外円の木々に遮られたかのようにその大きさを留めたまま、更に濃く濃く染まっていった。そして…弾けた。

集められた暗黒が外の闇に溶け込むように霧散し、空から桜色の粒が舞い落ち始める。

その場に現れたのは、まるで新品のような遊具たち、若々しい木目を際立たせる木製のベンチ、そして、その横に呆然と立ち尽くす一人の青年だった。

零は混乱していた。自分は、先ほどまで山間にポツンと作られた寂れた公園にいたはずだ。しかし、気がついてみれば、そこは森の中。不自然に拓けた森の広場。いったい何が起きたというのか。

まったく理解と整理が追いつかない頭で、なんとか次ぎにとるべき行動を模索する。数十秒その場に縫いつけられたかのように動かなかった彼が次ぎにとった行動は、自分の状況を確認することだった。

自分の身体を取りあえず動かしてみる。どうやらどこも問題はないうつだ。周りを見渡す。暗いので、ポケットから携帯電話を取り出して、その明かりを頼りに視界を探る。周りの風景だけを抜いてそこにあつたのは見覚えのある遊具と木製のベンチ。しかし彼が知っている物とはそれらは随分と違っていた。

「…新しくなってる」

そう、ブランコは全く錆びておらず、脚には青いペンキ塗料がムラ無く綺麗に塗られており、滑り台も同様に真新しさを感じさせる金属の光沢を取り戻していた。彼が先ほどまで腰掛けていたベンチは、触れてみてもどこも朽ちておらず、今にも木の香りが漂ってきそうなほどに白く艶やかだった。

「どうなってるんだ…？」

落ち着かせようとしていた思考が更に加速し、目眩を引き起こす。零は倒れそうになる身体を近くのベンチに手を伸ばし支えた。ベンチが軋むことはなかった。零は顔を伏せながらそのベンチに腰を下ろす。今は整理する時間が欲しかった。

顔を伏せて頭を抱える零の肩にヒラヒラと一片の桜の花弁が舞い降りた。横目でそれを見た零はハツとした表情で顔を上げ、何かを探るように辺りを見渡した。

「ミルアさんは！？…いない…か…」

自分は妖怪であると言った女性。零に何かを託した女性。そして彼をこの状況に置いた張本人であろう女性。少なくとも、零の目が届く範囲にミルアの姿はなかった。

彼女がいれば、何かが分かると思った。この場所がどこで、何のために自分を送り込み、そして何をすればよいのか。しかし、彼の期待とは裏腹に、この場所には彼以外に人影はない。完全に指標を失ってしまっていた。

何分時間が経っただろうか。10分、いや優に30分は経っていてもかもしれない。未だに零はその場を動くことなく、ただベンチに腰掛けて思考を巡らせていた。

少しは落ち着いた頭で周りを見渡してみると、幾つか分かったことがあった。まず、ここは自分がいた世界とはどこか違う世界であるということ。そして、時間の流れが違うのか、それとも零自身がタイムスリップでも起こしたのかは分からないが、確実に元の時間軸ではないということだった。

まず、空気が違った。形容しがたいが、どこか清々しくもあり、刺々しくもある空気。そう、自然。何者にも汚されず、悠久の時を過ごす自然の空気がここにはあった。次ぎに、どうやら生態系までも違う物であるようだ。見たこともない植物や動物が零の周りの森から顔を出していたからだ。一つ目のリスがこちらを眺めているのを見つけた時は驚きすぎて声が出なかった。最後に、月である。

彼が最後に見た月は、真上に輝く月があった。しかし、拓けたこの場所から現在見える夜空の範囲に月は見あたらない。つまり、新月。月の満ち引きから、彼は過去か未来のどちらか、または違う時間軸に来たことになる。

零には、どうも自分が思っているよりも事態は深刻であるように思えて仕方なかった。勝手の分からない世界に一人で放り出されて、誰の手も借りることも出来ずに呆然と立ち尽くす。これを笑わずにいられようか。

「愚痴つてても仕方がない。…行くか」

決意して、零はその足を深い闇が誘う森の方へと向けて歩き出した。動き出してみれば不思議と不安は引っ込んで、代わりに好奇心が顔を出した。もしかしたら、今ここにはいない彼女の存在を認めた時から、彼は期待していたのかもしれない。自分の知らない世界で見つかるかもしれない答えに。

一歩踏み出してみると、そこはまさに異世界であった。聞いたこともない鳴き声がそこら彼処に響き渡り、鬱蒼と茂った植物が彼に行く手を阻むかのように立ち並ぶ。

勇んで森に足を踏み入れたのは良かったが、まったく道が分からない。未知なる道なき道の草根をかき分けて足を進めるが、一向に目標となる様なものは見えてこない。頼りになるのは、左手に携えた携帯電話の明かりと、少しでも足しになるかと思い、背の低い樹木から折り取った長さ60センチほどの木の枝だけ。

よく考えてみれば、ここは妖怪である彼女に連れてこられたのであろう異世界。少なからず、人外が存在もいることだろう。そして、それらが彼女のように友好的な妖怪ばかりだとは限らない。いつ自分の首が身体と切り離されてもおかしくはない状況を理解した時には、零はもう引き返すことの出来ない所まで魔境に入り込んでいた。

「まったく、こんな所でも人くらいはいるだろうに……。もしかして、妖怪とかそういう類のモノしかないのか……？」

歩き始めて一時間。なんとか森を抜けようとひたすら真っ直ぐに進み続けていた零は、代わり映えしない景色に愚痴をこぼしながらその場に立ち止まった。慣れない道を歩いていたせいか、着ていた服は汗で肌に張り付き、足は意識しなければ倒れ込んでしまいそうなほど疲れていた。

さすがに少し休憩を取ろうと、零は近くにあったほどよい木の根に腰掛けた。

ここまで何にも襲われることなく進んで来られたのは、運が良かったとしか言いようがない。地面の傾斜などから考えて、どうやらここは山の裾野などに広がる森のようで零は随分奥地に召還されたようだ。驚異としては妖怪はもちろんだが、猪などの野生生物もいるはずだ。

「とりあえず、人がいる所に行かないと……時間は分らないけど、こんなところで一晩明かすのはごめんだ」

「そーなのかー」

突然、零の真後ろから掛けられた声。零は、あまりの驚きに声が出なかった。背筋が凍り、身体が意思とは無関係に震え出す。あまりにも突拍子過ぎた。気配も音もなく、背後にいつの間にか現れていた何者か。

考えるまでもなかった。人外。魔の者。零は、冷たく尖った刃物を首筋に突きつけられているかのように身動き一つ取れなかった。鼓動が早くなる。早く逃げろと頭が急かす。それでも、蛇に睨まれた蛙のように手足は動いてくれなかった。

「一週間ぶりの食べ物だあ」

食べ物、そう、いま零の真後ろにいる生物は、彼のことを、食べ物と称した。つまり、人間を糧とする人と同じ言語を持った生物。零の想像は、確信に変わった。命の危機。零はまさにこの瞬間、声

の主を死を運ぶ災厄、命を奪う捕食者であると理解してしまった。

「あ……う……」

「どうしたの？にげないの？」

不思議そうに零に聞いてくる声は、年端もいかない少女のものであるようだ。しかし、その言葉は少なくない死の恐怖を孕んだものだった。絶対に逃がさないという執念の籠もった言葉が、さらに零を硬直させる。

声の主は、動かない獲物に飽きたのか、わざと足音を響かせるように歩き、未だ恐怖に囚われた零の目の前に立つと、口の端を持ち上げて、本当に嬉しそうに、笑った。

「あつ、一応聞かないと。ねえ……貴方は、食べても良い人類？」

零の前に立った捕食者の笑顔。それを見た零の絶望に染まるはずだった表情は、驚愕の表情に変わった。

忘れるはずがない。つい先ほどまで話をしていたのだから。間違えるはずがない。姿形が変わっていても、目の前にある少女の表情は、まばゆい金の髪は、彼女のものともあまりにも似ていたのだから。

「みつ……ミルア……さん……？」

招かれた森の中で（後書き）

今回はここまで。

次の更新は未定です。

気長にお待ちいただけたら幸いです。

それでは。

青年と少女

空気が変わった気がした。今まで感じたことのない死の空気を味わっていたというのに、零の発言がその雰囲気吹き飛ばしたようだ。目の前の少女の姿をした人外は、獲物がいきなり自分を知っているかのように言葉を掛けてきたことに驚いているのか、目を瞬きさせながら小首を傾げて零を見つめていた。

「ミールア…？違うよ！私は、ルーミア！」

零の言葉はしっかりと聞こえていたようだ。その証拠に彼女は自分の名前を少し強調して、零の発言を訂正する。零は、頬を膨らませて憤る彼女を不覚にも可愛いと思った。

「ルーミア…。悪かった、人違い…。いや、妖怪違いかな」

零が彼女の名前を訂正すると、ルーミアと名乗った少女は、何度か頷きながら肯定の意を示した。そんなルーミアを眺めながら、零は思考を巡らせる。

どうやら、目の前の少女は問答無用で襲いかかってくるような妖怪ではないのだろう。もちろん、安全というわけではないだろうが、少なくとも、ある程度の融通が聞くのならばこの場を納めることは可能かもしれない。

「ねえ。貴方は名乗ってくれないの？」

「んっ？ああ、申し遅れたな。俺は、神代零。人間だ。つい一時間

前にこの世界に来た」

少女は常識も弁えているようだ。これなら、事情を話せば助かるに違いない。運が良ければ、人間のいる所まで連れて行ってくれるかもしれない。零がそう希望を持っていると、ルーミアはちよつと嬉しそうな顔で笑顔を見せた。

「へえ、外来人なんだ。それじゃあ、遠慮無く食べられるわね！」

「えっ……？」

輝かしいほどに素敵な笑顔を浮かべながら、彼女は右手を零に向けた。瞬間、零の身体は咄嗟に地を蹴って、その平行線上から飛び退いていた。遅れて、少女の翳していた手から、光線のようなものが発射され、先ほどまで零がいた場所を穿つ。

熱と質量を合わせ持った光線は、零の背後にあった木に当たり、木に直径5センチ、深さ3センチほどの穴を開けて霧散した。

「逃げないでよ。せつかく捕まえたご飯なんだよ？」

再び零に襲いかかる死の恐怖。愕然とした目で、零がルーミアを見る。彼女はすでにこちらに手を振りかざしていた。その手のひらに黄色みを帯びた光が充填される。

やばい！と零が思った時には、ルーミアから発射された光線が膝をついていた零の左足に接触していた。足が吹き飛ぶかのような感覚。例えるならば、丸太をその左足に向かってを振り抜かれたような衝撃が零の体勢を崩した。

「うわああ!!」

1メートルほど後方に転がるように吹き飛ばされる。地面に打ち付けた身体の各所が痛い。しかし、驚くべき事に直撃を食らったはずの左足は問題なく動いた。そこには先ほどの木のように穿たれた痕もない。

「あれえ?なんで動けるの?レイって本当に外来人?」

ゆっくりと立ち上がる零を見て、怪訝そうにルーミアが眉をひそめた。普通ならば、先ほどの攻撃で獲物は行動不能。あとは美味しくいただくだけの筈だったのだが。

「どうなってるか分からないのは、こっちも同じだ」

零も自身に起こった不可思議な現象を思い起こしていた。確かに光線は彼の左足に当たった。しかし襲ってきたのは衝撃だけ。それは、とても奇妙な感覚。あたかも、自分の肌がもう一枚外側にあるかのような。それも、とびきり固い、まるで重みのない鎧を着込んでいるかのようなだった。

「うーん…。それじゃあ、もう一発!」

「ちょ!まっ!」

零が言うよりも早く、今度は丸い弾丸のような光球を放ってくるルーミア。零は焦って顔に向かってくる弾丸を遮るように両手を翳した。すると、その弾丸も軽く押されるような感覚だけを残して霧散してしまった。もちろん、零の手には焦げ目も何もない。

あっけにとられる青年と少女。場に冷たい空気が漂った。

しばらく硬直状態が続いた。仕方がないといえば仕方がないだろう。何故なら、二人ともまったく理解が追いついていないからだ。

零は、我が身の変化。ルーミアは、目の前の存在の正体。どちらも戸惑いを隠せない表情で見つめ合うだけの時間が過ぎていく。二人の間を照らすのは、零がその手に掴む携帯電話の明かりだけ。

しかし、さらに数秒すると、我慢できなかったのか、ルーミアが身を小刻みに奮わせながら、頬を膨らませながら言い放った。

「あゝもう！こうなったら、直接この手で実力行使なのだ！！」

すると、ルーミアの手のひらから闇が現れ、ルーミアを徐々に覆い隠していく。

「これは…ミルアさんと同じ…」

夜の闇を持つてしても、並び得ない闇。光を一寸も届かせない闇が零をも覆い隠していった。自分の手足も視認できない闇の中。零の目の前から声がした。

「いったきまゝす！！」

「えっ？」

フワッと腰辺りを抱きしめられる感覚。背中が窮屈そうに結ばれた小さな両手が、零を逃がすまいと硬く互いを掴み合う。そして、零の首筋に生暖かい吐息がかかる。瞬時に理解した。このままでは、

首筋を噛み切られる。しかし、抵抗をしようにも、彼女の少女とは思えない力のせいで動くことも出来ない。

そして、少女の口が青年の首筋を…噛み切れなかった。

「へっ?」

「うっ…!!!」

それは何というか、ただ、首筋にじゃれ合う子猫の甘噛みのようなくすぐったい感覚を残しただけであった。ルーミアの吐息と湿った舌が零の首筋を擦る。

「うっうう!! 固い!!…なんで?」

どうやら相当な力を入れていたようだが、一向に訪れない肉を裂く感覚に、諦めたようだ。気づけば、闇は晴れており、零の目の前にはふて腐れたように涙目のルーミアが零を見上げていた。

「あつ、その…なんかごめん」

罪悪感が沸いた。今こちらを見つめている妖怪が、もう自分を取って食おうとしていた妖怪には見えなかったから。今のルーミアは、欲しい者が手に入らないで拗ねている少女にしか見えない。

「ふん…もういいもん。貴方は食べられない人類なんだね」

「どうやら、そうみたいだな」

心底残念そうに密着していた身体を離すルーミア。零も自然と一

歩下がり距離を取った。

「ねえ、レイは本当に外来人？ 齒が立たない人間なんて聞いたことないわ。もしかして、最近の外来人は特殊な修行でも受けてるの？」

「齒が立たない、の意味がそのままの意味になってる気がするが…。特殊な事なんてしていないし、特別な能力を持ってるわけでもない。ただの人間だよ」

「そーなのかー、どこか納得のいかなそうな顔でルーミアは地面を靴のつま先で蹴り始める。相当欲求不満なのだろう。土が飛んできているので止めていたきたい。」

今の状態なら、ルーミアにこの世界の話を聞けるかもしれない。あわよくば、どこか人のいるところまで案内して貰えると幸いだ。と零は土を穿ち続ける彼女に話しかける。

「なあルーミア。ここはいつたいなんて言う世界なんだ？」

「ん？…ああ、ここは、幻想郷。幻想となったものたちが辿り着く、最後の樂園だよ」

幻想郷、彼女はこの世界をそう呼んだ。幻想となったもの。つまり、忘れ去られたもの。ここは、存在を否定されたものたちが住まう、最後の拠り所。長き忘却の歴史を集める幻の里

「幻を想う郷。幻想郷か…」

零がさらに質問をしようとルーミアを探すと、目の前に彼女の姿は無く。3メートルほど前方にルーミアのものであろう丸い闇の

球体がフヨフヨと浮いて離れていった。

「はあ……。またダメだったのか……。今日の収穫は、変な袋だけ」

ぶつぶつと何かを呟きながら、去っていかうとするルーミア。辛うじて零の耳には、お腹減ったなあ、という言葉が届く。さすがに零も同情した。何せ、彼女は一週間ぶりの食事と思い、嬉々として零に襲いかかったのだ。しかし、結果は惨敗。あまりにも不憫すぎる。

零は、自分の服の右ポケットを探る。中には、奇跡的にまだ形を保った大きな飴玉が一つ。これがあつたから、地面を転がった時に必要以上に痛かったのだ。

「おーい！！ルーミア！！」

零はゆっくり遠ざかる球体に小走りで近づいた。零が近くに寄ると、ルーミアが闇の中から顔を出す。

「ん？？まだ何かあるの？レイは食べられないから、もう逃げても良いよ？」

「あゝ、まあ、その……ほら、やるよ」

零はちよつと気恥ずかしさを顔に出しながら、ルーミアにピンク色の飴玉を差し出した。命を奪われそうになった相手に同情するのは、本当に莫迦らしい行動だと零も分かっていた。しかし、情けは人のためならず。ここで少しでも恩を売っておけば、なにかの時に役立つかもしれない。

そして、それ以上に、零にはこの少女を放っておく気にはなれなかった。理屈ではない。ただ、なんとなく。彼は彼女と交友を持つことを選んだ。

「えっ？…くれるの？…ありがとう！！」

効果は覲面だった。ルーミアは闇の中から全身を現すと、愛らしい笑顔で零の手から飴玉を受け取った。本当に彼女は、妖怪なのだろうか？と疑ってしまうほどの無邪気さに、零も口元を綻ばせた。

そのあと、包装の開け方が分からないで唸るルーミアの代わりに、袋を破って飴玉を取り出し。水面に浮かび餌を待つ鯉のように大口を開けて彼を見つめる彼女の口に零は、飴玉を放り込んだ。

美味しそうに口をモゴモゴさせるルーミアを眺めながら、零はこのあとどうするかを考える。もう夜もかなり更けているだろう。もしここでルーミアと別れたら、もっと凶悪な妖怪の餌食になるかもしれない。先ほどの不可解な力がまた働く保証は全くないのだ。

「んむ…ねえ、レイは、…んっ、これから、どう、するの？」

「とりあえず、焦らなくても良いから、飴玉を溶かしきってから喋ってくれ」

それから数分後。ルーミアも飴玉を食べきり、改めて二人は互いに向き直った。

「美味しかった〜。ありがとうレイ！それで、レイはこれからどうするの？」

「そうだなあ…、俺はこの世界のことを全く知らないから、誰か詳しい人に聞けたら嬉しいんだが」

「うーん、それなら、紅白のところが一番近いかな…」

紅白？と零が疑問で返すと、ルーミアは肯定の意味で頷きながら、零に説明し始めた。

「博麗霊夢、この幻想郷にある、博麗神社の巫女だよ。でも私、あいつ嫌いなよね…前もこっぴどくやられたし…」

「そんなに凶暴なのか…幻想郷の巫女は…」

巫女といえば、おしとやかで、礼儀正しく、いつも笑顔を絶やさない女性といったイメージがある零には、霊夢という巫女が妖怪をボコ殴りにしている姿が想像できなかった。

「ちなみに、ここからその神社まではどのくらい時間が掛かるんだ？」

「歩いて、一時間位かな、この山の山頂付近だよ」

ルーミアの言葉を聞いて、零はうなだれた。なぜなら、彼はこの緩い木々の茂った山道を下って来たのだ。場所が分からず、迷っていたというのもあるだろうが、また坂道を登るはめになるとは。

「？どうしたの？私もついて行こうか？」

「いいのか！？」

「うん、レイは飴玉くれたしね。それに、なんだか貴方、面白そう！」

そういつて笑う彼女と、公園で出会った女性の顔が重なる。

ふふ…貴方って、面白い人間ね

やはり、似ている。服装は、ちょっと違うし、髪には紅いリボンが括り付けられるように着いているが、その顔立ちは、目を見張る物がある。ミルアが言っていた、あの子とは、ルーミアの事ではないだろうか。零の想像は膨らんでいった。

「あつ、でも今日は遅いから、たぶんレイムも寝てるよ。だから、行くのは日が昇ってからだね」

「…なんですと？じゃあ、今日は野宿か…。初の野宿がこんな森の中なんて…」

うなだれる零をみて、ルーミアはちょっと悩む顔をしたあと、零に提案した。

「じゃあ、私の家にくる？狭いけど、ここで土に寝ころぶよりはましだよ？」

「ぜひ！」

零の返答は早かった。それにルーミアは苦笑しながら森の奥へ歩き出す。付いてこいということだろう。零はこれから起こるであろう数々のこと、そして、今日出会った彼女たちのことを考えながら、先に行く少女を追いかけた。

青年と少女（後書き）

ここまでご覧いただき、誠にありがとうございます。

この小説は、不定期更新です。

次の更新まで、勉強でもしながら、気長にお待ちください。

それでは、また次回。

博麗の巫女

薄暗い洞穴の中、規則正しく寝息を立てる少女と、唸りながら何度も体勢を変えては寝返りをうつ青年の姿があった。時間は明け方。洞穴の入り口の方から、木々に遮られた淡い光が差し込んでいた。

「うう…確かに、土の上で寝るよりはマシだろうけど。それでも岩の上はきついな。絶対休ませる気ないだろう、この岩肌」

零が唸っている原因、それはルーミアの寝床の悪さであった。そこは、自然に出来た鍾乳洞の様な洞穴で、人二人が寝るには申し分ない広さがある。しかし、そこは洞穴。大きな欠点があった。そう、地面が固くて、ゴツゴツしているのである。

なんと寝返りをうつても、背中に当たる岩の突起物。いつも柔らかい布団の上で寝ていた零の眠りを妨げるには十分な障害だった。ふと気になって隣、といっても3メートルほど距離がある所で眠っている少女の方に、零は目を向けた。

「うん、しっかり寝られるだろうな。だって、掛け布団敷いてるんだし」

そう、ルーミアが寝ている所には、ボロボロの掛け布団が敷いてあった。重要なのは、それが掛け布団であるところだ。大方、どこかで拾ってきたのだろうが、あれは敷き布団ではなく、掛け布団。しかも、以前はそれなりに高価であったであろう刺繍の細やかなもの。

まあ、たしかに敷き布団なしにこの床で眠れというのは些か無理があるだろう。無惨にすれてボロボロになった掛け布団を哀れみながら、零は小さく溜め息を漏らした。

「眠れそうにないし、ちょっとこの世界の朝の空気でも吸ってくるかな」

けだるそうに身体を起こした零は、軽く伸びをして凝り固まった身体をほぐすと、洞穴の入り口の方に足を向けた。足がまだ疲れているのか、フラフラと危なっかしい足取りではあったが、なんとか壁伝いに歩き、外に出た。

朝の日差しが木漏れ日となって差し込む夜明けの森は、静寂に包まれて綺麗だった。

それから暫くして、ルーミアが目を覚ました。寝ぼけていたのか、様子を見に来た零の腕に噛みつくという暴挙に出たが、案の定、肉に有り付くことは出来ず、彼女は首を傾げ、零は苦笑しただけであった。

そして現在、彼らは博麗神社に続くらしい長い石段をゆっくりと登っていた。どうやらこの山はなかなか標高の高い山であるらしい。零がこの世界にやって来たときに居たのは、現在登っている石段の東側。坂の緩やかな森だったようだ。

しかしこの階段、異様に長い。かれこれ一時間ほど登っているが、まだ神社らしい鳥居は見えてこない。それに、あまり人が通っていないのだろう。落ち葉や土が積もり、苔生した石段はとても滑りやすい。普段以上に神経を使うため、零の疲労はピークであった。

「ちょ…ルーミア…休憩…しない…か？」

「ん…？もう少しだから、頑張れ…。男なのにだらしないぞ？」

息も絶え絶えな零に対して、少しも慈悲を掛けてくれないルーミア。言っている本人は全く疲れている様子はない。なぜなら、彼女は…飛んでいるから。それはもうフワフワと気持ちよさそうに地上から30センチほど浮遊して、斜面平行に飛んでいる。本人はピクニク気分なのか楽しそうだ。

「くっ…卑怯な…。妖怪ってそんな簡単に人類の夢を形に出来るのか」

「この幻想郷は、飛べない生き物の方が少ないと思うけど。紅白も白黒も…あと、メイドも人間なのに空を飛ぶしね」

その言葉を聞いた零は、項垂れながら、足を懸命に動かす。どうやら幻想郷に彼の知る常識なんてモノはないようだ。同じ人間ですら空を飛ぶ。もう、魔法使いが居ても、神様が居ても驚かない。と零は半ば諦めの混じった表情で、山の頂上へ延びる石段の先を見据えた。

「ほら！見えてきたよレイ！あれが神社の入り口だよ」

ルーミアが指し示す方、つまり零が見上げた方には、石段が途切れ、道の左右に石柱が小さくだが見えていた。

「やっと着いた！」

石段を気合いで登り切った零は、石柱の土台に手をつくると、その

ままへたり込んだ。肺が空気を欲して息遣いが荒くなる。火照った身体が、山の涼しい空気に晒されて、急速に冷えていくのが分かる。

「お疲れ様。私は、紅白巫女を呼んでくるから、すこし休んだら、表の方に来てね」

「分かった」

ルーミアはそのままフヨフヨと浮遊しながら、表に向かっていった。ふと疑問に思った零は周りを見渡す。目の前には、先ほど登ってきた、石段と、ハツとするような雄大な光景。どうやら、この幻想郷を一望できる位置にこの神社は建設されているようだ。

境内を見てみると、そこにはあまり手入れがされていない様に見える池。その先には、それなりに大きい神社が見える。しかし、賽銭箱や参拝道が見えない更に、鳥居がない事から、ここは境内裏であるようだ。石段を登って出てきたのが、境内裏。いったいどうなっているのだろうか。

暫し考えていた零だったが、ここは常識が通用しない場所と割り切って、幻想郷の景色を眺める事にした。

よく見れば、幻想郷は盆地のような作りだった。零から見て正面には、そこだけ不自然に霧に包まれた大きな湖があり、その対岸には朧気に赤い館の様な建物が見える。左側の山の麓には集落が見え、右側には広大な森、その奥に、この山よりも高そうな切り立った山が見えた。

他にも色々と感じになった場所はあったのだが、何時までも休んでいる訳にはいかない。ルーミア達はもう待っていてくれるだろう。

そう思った零は、勢いよく立ち上がり、表へ続く沿道を歩き始めた。

ふと視界の端に、髭の生えた亀が池から顔を出しているのが見えた気がするが、気のせいだろうとすっかり視界に移すことを止めた零だった。

表に出てみると、そこは綺麗に整備された神社らしい神社だった。広い境内には雑草もなく、奥の方には立派な朱塗りの鳥居が見える。どうやらこちらが正式な出入り口のようなのだが、鳥居の奥には巨大な木々が生える森があり、人が来る様子もない。

「あ、やっと来た。レイ！！こつちこつち！！」

零の左側から声が掛かる。声のした方を振り向くと、こちらに手を振っているルーミアと、掃除中だったのだろうか、竹箒を片手にルーミアと向かい合っている大きなリボンを付けたちよっと奇抜な巫女装束を身につけた少女が居た。あの少女が、博麗霊夢なのだろう。

零は二人の方に足を向けて、小走りで駆け寄った。近づいてみると、この巫女。本当に奇抜な格好をしている。脇を空けた巫女装束など見たことがない。更に、そのデザインも、彼の世界の巫女とは異なっていた。彼女の表情は無表情。または、怪訝そうな顔。どちらにしても、好意を持ったものではない視線が零を見つめていた。

「ふん。本当に外来人が居たのね」

「だから、本当だって言っただじゃない！！」

「うるさいわね。誰が人食い妖怪が人間を連れてくるなんて話信じ

るのよ」

うっ！と唸りながら、ルーミアは頬を膨らませ、巫女はそれすら軽くあしらう。どうやら、この巫女も相当に良い性格をしているようだ。零が二人のやりとりを見ていると、巫女が彼の方を再度振り向き、声を掛けてきた。

「で。あんたがこいつに連れてこられた外来人ね？私は博麗霊夢。楽園の素敵な巫女よ。霊夢で良いわ。…あんたは？」

「あ、ああ、申し遅れたな。神代零。昨日この世界にやって来た人間だ。俺も零で良い。近くの森を彷徨っているところを、そのルーミアに襲われて、なんやかんやでここにいる」

そう彼が説明すると、霊夢はすこし驚いた表情になり、手を額に当てて、少し考え込んでいるような仕草をとった。それにしてもこの少女。少女とは思えない風格がある。歳は零と変わらないか少し幼い位だろうが、普通の人間とは違った魅力を感じる。どうやら、妖怪を退治しているというのも間違いではなさそうだ。

ルーミアが泣きそうになりながら零にすがってきたが、零にはどうすることも出来ないため、軽くあやしていると、霊夢が思考をやめ、話しかけてきた。

「あんたたち、とりあえずあがりなさい。しっかり話も聞きたいし、これからのことも話さなきゃならないから」

そして、彼女は零たちに背を向けて、神社の裏手へ歩いていく。未だ足にしがみつくルーミアを引きずりながら、零は彼女のあとを追った。

神社の裏手にある玄関をくぐると、すぐに居間へ通された。それなりに広い居間の中は、冬の名残であろう炬燵が中央に陣取っており、古い家屋の居間、という感じがした。家主である霊夢は、零たちに適当に寛ぐよう言っ、お茶の準備をしいった。零が足を炬燵に突っ込むと、ほんのりと暖かい。どうやら電気を使わずに、湯たんぽを入れているようだ。

ルーミアは意外にもおとなしく炬燵に足を突っ込んで静かにしている。視線は、炬燵の上の蜜柑。どうやら、この少女は食い気が強いようだ。まあ、腹が減っているのも事実だろう。

無言のまま五分ほど経つと、居間に霊夢が戻ってきた。

「お待たせ。それじゃ、レイがこの世界にきた経緯を話してくれる？…ルーミア、別に蜜柑は食べても良いわよ。一人二個までね」

「分かった」

「やったー!!」

嬉々として蜜柑を手にとるルーミアを尻目に、零はここまで来た経緯を霊夢に話した。

公園でルーミアに似た女性に会ったこと。闇に包まれたこと。気がつけばこの世界にやって来ていたこと。ルーミアに会ったこと。ルーミアの攻撃が効かなかったこと。なにか不思議な感覚がすること。途中ルーミアの感想も交えながら、全てを話した。

「…なるほどね。どうやら、あんたは思ってたより厄介なことに巻

き込まれたみたいね」

靈夢が腑に落ちない表情で零に告げる。零も自身の状況が芳しくないことを知り、焦りが顔に表れていた。ルーミアは三個目の蜜柑に手をつけようとして、その手を靈夢にはたき落とされた。

「はぁ…どうせまた紫のせいだと思ってたけど…」

「あらあら、心外ですわ」

靈夢が溜め息と共に漏らした、言葉に、どこからともなく返事がした。

博麗の巫女（後書き）

ここまでご覧いただきありがとうございます。

この小説は不定期更新です。

次の更新まで、たこ焼きでも食べながらお待ちください。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081q/>

闇と笑顔と紅いリボン ~ a dark and doable dream ~

2011年10月7日20時29分発行